

合格実績100%

大学受験必勝小論文

黒木 紹光



著作権について

「必勝小論文」（以下本マニュアル）は、著作権法で保護されている著作物にあたります。本マニュアルの取扱については、下記の点にご注意下さい。

- 本マニュアルの著作権は、株式会社リマークコーポレーション黒木紹光にあります。
- 黒木紹光の書面による事前許可なく、本マニュアルの一部または全部を、印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー、ホームページ等のあらゆるデータ蓄積手段により複製、流用、転載、翻訳、転売（オークションを含む）等を行うことを禁止します。

使用許諾契約書

本契約は、本マニュアルをダウンロードした個人、法人（以下、クライアントと称す）と著者との間で合意した契約です。本マニュアルをクライアントが受け取り、ファイルを開いた時点でクライアントはこの契約に同意したことになります。

第1条 本契約の目的

黒木紹光が著作権を有する本マニュアルに含まれる情報を、本契約に基づきクライアントが非独占的に使用する権利を許諾するものです。

第2条 禁止事項

本マニュアルに含まれる情報は、著作権法によって保護されています。クライアントは本マニュアルから得た情報を、黒木紹光の書面による許可を得ずして出版、講演活動および電子メディアによる配信などにより一般公開することを禁じます。

第3条 責任の範囲

本マニュアルの情報の使用の一切の責任はクライアントにあり、この情報を使って損害が生じたとしても、黒木紹光は一切の責任を負いません。

〒883-0004宮崎県日向市浜町3丁目29番地
株式会社リマークコーポレーション
黒木紹光

目次

● はじめに	(3)
<u>基本編</u>	
1. 小論文試験の内容	(4)
2. 小論文の採点基準	(6)
3. 構成	(7)
4. 小論文注意事項	(8)
5. 論理性を決定付ける要素	(10)
<u>実戦編</u>	
6. 論文作成要領Ⅰ／メモ	(11)
7. 論文作成要領Ⅱ／構想	(11)
8. 論文作成要領Ⅲ／作成	(12)
9. 論文作成要領Ⅳ／時間配分等	(12)
10. 試験までにやるべきこと	(14)
● おわりに	(15)



はじめに

私は、1987年から2008年の実に21年間も、学習塾を経営しました。その後、訳あって保険業界に転じましたが、21年間の受験指導期間中に、必要に迫られ、様々な受験ノウハウを身に付けていきました。

本マニュアル「必勝小論文」は、その様々な受験ノウハウの一つを、是非多くの受験生に役立てていただきたいと考えて作成しました。

小論文指導を始めた切っ掛けは、受験生との2者面談でした。塾生の中の高校受験生、大学受験生については、私が進路相談や学習相談をしていましたが、その中で、いろいろな悩みや問題の相談を受けます。

そのひとつが小論文対策だった訳です。内容を確認すると、本来文章を書くことが得意な方の私は、すぐに、具体的なイメージが湧きました。

その時点で、困っている塾生を何とかしてやりたいと思う気持ちが次の言葉となって口から出てしまいました。「見てあげるから、一度書いて持ってきて下さい。」

その最初の生徒には、書いたものをいろいろ指摘して改善法をアドバイスし、書き直しをして再度持ってこさせることを、3回くらい繰り返しました。

教える立場としての正式な国語の勉強もしたことがない私でしたが、教え始めてすぐに手応えを感じていました。そして、不遜にも、私はその最初の生徒が合格するだろうと予想しました。

結果は予想通り合格でした。その後、毎年のように塾生の小論文指導を1～2名積み重ねていきましたが、わずか9名にしか過ぎませんが全員合格という記録を残しました。

合格大学は、宮崎県立看護、立命館、早稲田2名、京都教育、久留米、九州産業、筑紫女学園、柳川リハビリテーション学院、です。たまたま9名全員が合格したに過ぎなかったのかもしれませんが、私自身は、合格が重なるほど指導方法に自信を持ち、指導ノウハウも自然に体系化しました。

受験で小論文が必要なあなたには、本マニュアルの利用によって、是非、合格を確実にすると共に、本マニュアルの重要な目的である、多大な時間を費やすことなく、効率のよい小論文対策をしていただければと願っています。

尚、本マニュアルには基本編のみの「無料版」と基本編+実戦編の「テキスト版」があります。合格をより確実にしたい場合は、「テキスト版」のご利用をお勧めいたします。



1. 小論文試験の内容

一口に小論文といっても、その分野、形式、求められる内容は実に多様であると言えます。10校のパターンは10通りの別な小論文だと言っても過言ではありません。したがって小論文対策は、この受験校のパターンに合わせる事が、実戦上非常に重要になります。

理想としては、どのようなパターンにも合わせる事ができる能力を身に付けることですが、他の様々な対策をしなければならないという限られた期間、時間の中では、小論文対策のみに多大な時間を費やすことは許されません。

したがって、各パターンに合わせて、必要な分野、形式、求められる内容に沿った効率的対策をすることが、本マニュアルが勧める小論文対策の重要な柱です。

●出題パターン

分野

なぜ分野の把握が大事かという点、論文を書く際のネタ（情報や知識）を最低限度取得しておく必要があるからです。

ネタを持ってなければ、全くの想像で、あるいは、テレビで仕入れた安っぽい情報や知識か教科書レベルのそれで間に合わせなければならなくなり、その時点で合格点は厳しいと言わざるを得ません。

また、出題内容が多少違ってても、仕入れたネタの内一部は必ず使えます。ですから、分野を把握したら、その分野の代表的な評論（新書類）を複数冊（2冊以上）読み、論点をノートに整理しましょう。

本を読む時間も取れない人は、インターネットでキーワード検索をして、論点をまとめたような資料を探すこともできます。

（頻出分野）

- | | | |
|-------------------|-------------|-----------|
| 1. 人間関係・コミュニケーション | 2. 情報化社会 | 3. 日本文化 |
| 4. 教育・学歴社会 | 5. 思想・芸術 | 6. 国際関係 |
| 7. 人権・男女平等 | 8. 法・民主主義 | 9. 政治・経済 |
| 10. 環境・エネルギー問題 | 11. 医療・医療倫理 | 12. 介護・福祉 |

出題形式

形式については、基本的に次の3形式のどれかになります。

- ①題名だけ与えられる。（最も基本的形式）
- ②課題文が出され、それについて論じる。（課題文の読解が必要）
- ③資料（表・グラフ・絵・写真等）が与えられ、それについて論じる。

形式については毎年踏襲されるので、同形式に慣れるには過去問を何年分も練習するのが最も合理的です。逆に言えば、小論文対策は、他の形式を練習するような効率が悪い努力は避けなければなりません。

求められる内容

これは、厳密な意味での「求められる」を指しているのではなく、学部や学科など系統によって必然的に求められる、基本的な価値観や感性を指しています。

概要を整理すると次のようになります。

①人文系（文・外国語など）

一般社会的観点から観た場合の多様性や異端を受け入れる柔軟性に価値を認めつつ、それは、人間社会の本質的観点での考察によって、一方で普遍的であったり、人が皆共有しているものであったりすることが少なくない。そうした、感性や洞察力を備えていること。

②教育系

教育者にとって常に立ち帰らなければならない原点とは、子供一人ひとりと向き合い、勉強や成績という単一の物差しで評価しない、子供の個性を軸とした考え方に立つ姿勢があること。

③社会科学系（法・商・経済など）

国家と国民、企業と労働者、政治家と市民、というように、社会構造の中で相対する、あるいは上下関係にある捉え方において、常に様々な問題が存在する。それらを統計や歴史的背景に照らして、科学的に考察する姿勢があること。

④医学系（医・歯・薬など）

生命自体を扱う分野という特殊性があり、生命を託すことができる人材かどうかを論文を通して観察するという面がある。医療倫理と志望動機については、出題テーマに関係なく、意見をまとめておく。

⑤理工系（理・工・農など）

発明や技術開発が人間にとってどのような影響をもたらし、人間はそれをどのようにコントロール可能なのか、そのような視点なしに論じてはならず、社会との関係性の認識を問われる。

（まとめ）

さて、ここで認識すべきは、受験小論文が、合格者を選抜するための試験であるという点です。

選抜する側は、論文の良し悪しもさることながら、受験生が合格に相応しい人材かどうかを計っています。したがって、高尚で独創的な論文を書く以前に、適性としてどうかという点は、より優先されて当然です。

客観テストには人間性は出ませんが、小論文には出ます。あなたは、そのことを理解した上で、上記を参考に、論文を書いてください。あなた自身が、正当な評価を受けるために。



2. 小論文の採点基準

基本的にどの学校も非公開なので、具体的な採点基準は明確ではありません。しかしながら、一部の確かな情報等を参考にするなら、凡そ以下のようなパターンだと推測されます。

いくつかの構成要素別に採点した合計で決定する

非常に常識的ですが、安定した客観性を確保できる標準的な採点方法だと言えるでしょう。

①理解力・洞察力

与えられた課題に対する的確な理解力や洞察力を採点する。

②論理性・構成力

意見や主張の論理性及びその構成力を採点する。

③独創性・発想力

意見及び主張の中にどれだけ独創的発想が盛り込まれているかを採点する。

④表現力・知性

表現の的確さや豊かさを採点する。

⑤人間性

論文から判断できる人間性を採点する。

配点・採点実務

では、①～⑤にそれぞれ何点を配分するか、採点は何人するか、最高点・最低点・平均点いずれを採用するかなど、実務について各大学の基準はほとんど分かっていません。

(まとめ)

しかしながら、その詳細が分かろうが分かるまいが、よい(=高評価の)論文がどのようなものか分かりさえすれば、そんなに困ることはありません。

あなたは、①～⑤での高評価を得る論文が、どのようにしたら書けるのかを理解し、限られた時間の中で、効率的に身に付けるためのトレーニングを積み重ねればいいのです。



3. 構成



さて、1～2章で小論文の概要は分かったと思います。ではここから、具体的に高評価となる小論文をどのようにして作成していくかを見ていきましょう。

自由奔放に書く”作文”と違って、小論文は一定の形、手順で書いていきます。それらの技術は才能に全く関係なく、理解しトレーニングで身に着ければいいことですが、実際の採点には大きく影響します。

野球で、セオリー（理論）通り攻めた方が成功の確率が高いと同様に、いやそれ以上に、小論文ではセオリー（理論）通り書くことが、合格への最短距離となります。

小論文におけるセオリー（理論）とは、4部構成ということになります。4部構成・4段落か、1000文字以上の比較的長い論文の場合、第2部と第3部を各2段落にして、4部構成・6段落にします。

第1部 問題提起

ある見解に対してそれが正しいのか正しくないのか、その論を提起する。つまり、「～だろうか。」という疑問文形式での提起となります。

第1部に含まれる要素として、テレビや新聞報道の引用、個人的な体験や身近な見聞の紹介、幾通りかの解釈が考えられる特定の単語に関する定義（論文において採用する意味を説明する）など、必要に応じて付け加えます。

第2部 意見提示

現象や状況について客観的に書きます。そして、論を深めるために常識、世論、他人の意見及び疑問を書きます。

第2部は第3部の前菜的な役割を担います。つまり、ここでは、一気に主張の核心には進まず、一定の説明に止めます。

第3部 展開

背景、歴史的経過、理由、根拠などを織り交ぜ、自分の意見、主張を書きます。

独創性や社会的視点など、独自の味付けや問題の一般論化などのテクニックは、柔軟性を持って、バランスを考慮しながら取り入れます。テクニックを用いることによって、差異化が図れ高い評価を得る効果がある一方、テクニックに走り、論文全体の核が希薄にならないようにしなければなりません。

第4部 結論

それまでに述べたことを受けて、結論（yes or no）を述べます。結論を述べる前の導入として、論の整理を付け加えると、説得力が増し、安定した印象に繋がります。

4. 小論文注意事項



その他、小論文の基本に含まれる重要ポイントがあります。こうした注意点を知らないと思わぬ落とし穴となってしまいますので、注意して、今後の努力を成果へと結び付けましょう。

強化ポイント

一通りの要素だけで高評価を勝ち取れないのは言うまでもありませんが、相対的に高評価に結び付く要素として、次の三つを意識して取り組みましょう。

①説得する

論理的展開で一貫性をもって堂々と主張しましょう。回りくどい印象ではなく、明解な論理は、自動的に説得力を増します。

②独創性

当たり前の内容ではなく、独自の視点、発想、逆説などをとりいれましょう。当たり前の内容だけだと、読む人の印象に残らず、その他大勢の中に埋没してしまいます。

突飛な内容は危険ですが、何らかの独創性が採点者へのアピールに繋がることは間違いありません。

③ 社会的視点

独り善がりの、あるいは一面しか見ていない意見ではダメです。視野を広く転じ、社会的な視点での考察を取り入れることで、自然に格調の高さに繋がります。

やってはいけないこと

知っておかなければいけないやってはいけないことを列挙しました。小論文のケアレスミスだと言えます。

①優等生にならない

品行方正な優等生発言は、その内容自体が問題ではなく、小論文においては評価されないということです。

②感情的にならない

論理性という土俵での評価を受ける訳ですから、いくら主張が正しいとしても、感情的な表現はマイナスの評価にしかありません。

③ 謙虚を表に出さない

謙虚になることは日常生活では評価されますが、小論文においてはマイナスでしかありません。謙虚な表現、控えめな表現は、小論文においては不要だと思ってください。

④曖昧な知識を流用しない

よくやりがちなミスのひとつです。課題に関するネタが少なかったり、論理的展開が組み立てられなかったりする状況では、何かで埋め合わそうと考えて、曖昧な知識を引用することがあります。

しかし、その引用した曖昧な知識が間違っていたり、誤解釈だったりした場合、そのことによってマイナスの評価を受けます。知識を引用する場合は、あくまで、正確な知識のみを使用しましょう。

⑤流行語、会話体、略語を使わない

日常生活の中で、あるいは、テレビ等のメディアにおいて、頻繁に使用されている言葉や言い回しを使用するのはやめましょう。

採点者は、あくまで小論文自体の客観的評価しかしませんので、それらは悪い印象でしか受け留められません。

⑥「私」を使う

自分のことは「私」を使用してください。

⑦「だ」「である」を使う

文章の語尾は、「だ」「である」で統一してください。

⑧一文を長くしない

一文の長さは、50～60字に止めましょう。長い文章は歯切れが悪くなり、伝える内容の点でも、マイナスの要因ともなります。



5. 論理性を決定付ける要素

小論文の最も評価を左右する論理性とは、一体どのようにすれば表現できるのでしょうか？

ここでは、その決定的要因ともなる（必須と言える）要素を説明します。

①言葉の定義

全ての論文には「キーワード」があります。課題として与えられた「キーワード」であれ、自分の判断で論文に使用する「キーワード」であれ、自分勝手な意味で用いてはいけません。

また、定義が明瞭でなく、どこかしら曖昧なイメージのまま論文中の「キーワード」を使用することは、論文自体が曖昧なイメージとなってしまいます。

そうした危険を避けるためには、繰り返し使用する「キーワード」の意味を、一度簡単に説明することが賢明です。そうすることで、論理性の評価＝論文の評価にプラスに働きます。

② 現象・現況分析

論の前提となる現象や現況を、できるだけ客観的に述べ、常識的な見解を紹介します。そうすることで、論の出発点が明瞭になり、問題提起の意義が深まります。

③ 背景、歴史的経過

現象や現況に至った事情を、どのような事実が影響しているのか、歴史的に見てどうなのか、それぞれの現象の関係性はどうかなど、問題の全体像を描写することで、より客観性や論理性を高めます。

④ 意見、主張

自分の考えを明確にするとともに、一貫性を持たせて、論理性を強調します。

⑤ 理由、根拠

意見、主張がどのような理由、根拠に基づくものかを述べることで、説得力を付加し、論理性を強固にします。



6. 論文作成要領Ⅰ／メモ（ステップ1～3）



いよいよここから、いかに高い評価の小論文を書くかを説明します。

完成までには、8つのステップがありますが、トレーニングを積み、慣れてくることで、一連の作業として流れるように進めていくことができます。

そうなった時は、ほとんどの場合、既に合格レベルに達していると言ってもよいでしょう。

まず最初に、メモ（箇条書き）を作成します。

①自由メモ

課題に関して、テレビ、新聞、本、人の話などの中の記憶していることを何でも思いつくままに書き出してみます。

② よい面・悪い面

課題に関してのよい面と悪い面を書き出してみます。

③ 第三者の立場に立って

課題に関して、第三者の立場に立って考えた上で、改めて気づいたことや想像できることを書き出してみます。

④関係性

メモしたバラバラな内容の関係性を考えます。そうすることで、課題に関する要点や核心、周辺の事柄といった、書こうとする論文の中でのメモの位置づけ（重要度）が見えてきます。

⑤補充・肉付け

メモに、分析・背景・歴史的経過・自分の意見などを加え、論文を書くために必要となるネタの量を確保します。

7. 論文作成要領Ⅱ／構想（ステップ4～6）

①結論の決定

論文の結論を決めて、同時に簡単な文にしてみます。

②組み立て

4部構成の各部に、既に作成した箇条書きを振り分け、ストーリーを具体的にしながら、必要に応じて段落数を決めて、段落構成を具体的にします。

③書き出し・接続詞の決定

初心者にとって、各段落の「書き出し」や文と文の繋がりを形成する「接続詞」は苦勞する部分です。

逆に言うと、本番で困らないためには、これをトレーニングによってパターン化して習得しておく必要があります。

トレーニングによってパターンを習得した者にとって、その強みは本番でいかに発揮されるでしょう。

8. 論文作成要領Ⅲ／作成（ステップ7～8）



①作成

ここまでで必要な準備はほぼ出来上がっていますので、途中詰まることなく、一気に書き終えることができます。

②推敲

漢字の誤字は避けたいので、自信がないものについては他の表現に変えます。助詞の使い方、句点の場所をチェックし、修正します。

9. 論文作成要領Ⅳ／時間配分等



時間配分

①プランニング時間算出式

プランニング時間は次の公式によって求めます。

$$\text{プランニング時間 (分)} = \text{試験時間} - (\text{制限文字数} \div 20 + 5)$$

つまり、試験時間が90分で制限文字数が1000の場合、 $90 - (1000 \div 20 + 5) = 35$ 分が与えられたプランニング時間(分)ということになります。括弧内の5は推敲用の時間です。

②メモと構成の時間配分

基本的には、①で算出したプランニング時間(分)を2:1で、メモと構成作業に振り分けます。

上記の場合だと、 $35 \times 2/3 = 23$ 分がメモ、 $35 \times 1/3 = 12$ 分が構成用です。

文字数

実際の文字数は、制限文字数の90%以上を目安とします。90%を下回るものが合ったとしても、80%を下回ることがないようにしましょう。

★進め方の例

作成要領 I～IVで述べてきたことを整理して表にしました。

ご覧の様に、**メモと構想に合わせて約40%を配分**します。この段階で、論文の内容と骨格が決まりますので、論文の良し悪しも必然的に決まります。

言い換えれば、”メモの内容次第”とも言え、この部分の充実なしには、どんなテクニックも意味を成しません。

パート	作業ステップ	時間配分 (計90分)	作業	作業内容
メモ	1	23 (約 25%)	自由メモ	課題に関して、思いつくままに書き出してみる。
			よい面・悪い面	課題に関してのよい面と悪い面を書き出してみる。
			第三者の立場に立って	第三者の立場に立ってみて、気づいたことや想像できることを書き出してみる。
	2		関係性	メモの関係性を捉え、それぞれの位置づけ(重要度)を決める。
	3		補充・肉付け	分析・背景・歴史的経過・自分の意見を付け加える。
構想	4	12 (約 15%)	結論の決定	結論を決めて、簡単な文にしてみる。
	5		組み立て	4部構成の各部に、メモを振り分け、ストーリーを具体的にしながら、段落構成をする。
	6		書き出し・接続詞の決定	各段落の「書き出し」と文同士の「接続詞」を決める。
作成	7	50	作成	1分20字以上のペースで書く。
	8	5	推敲	誤字、助詞の使い方、句点の場所をチェックし、修正する。

10. 試験までにやるべきこと



ここまで、小論文の捉え方、ポイント、書き方等を説明してきました。したがって、概略としては全体的に理解できたのではないかと思います。

最初に断りましたが、このマニュアルは、小論文の書き方を丁寧に説明することが目的ではありません。

目的は、効率的に、合格点を取れる小論文の書き方をマスターすることです。

あなたは、今から、このマニュアルを参考にしながら、本番までに、合格点を取れる小論文の書き方をマスターしなければなりません。

最後に、最も重要なその点について、説明します。

①情報収集・整理

あなたが受験する学校の小論文試験の、出題分野や形式等を過去5年以上確認しましょう。もちろん、時間・制限文字数・配点・課題文など、必要な情報全てを収集してください。

②マニュアルの理解

マニュアルは1～2度読んだだけで理解したとは言えません。本当に理解しないと、やはり後々高い評価の小論文を書く上でマイナスとなりますので、実際にトレーニングに入った時、再度読み直してください。

③模範解答分析

受験校のものでなくても構いませんので、模範解答を入手して、本マニュアルに沿って分析してみましょう。そうすることで、高評価の小論文の構成要素が具体的に把握できます。

④ネタ収集

出題分野の代表的な評論（新書類）を複数冊（2冊以上）読み、論点をノートに整理しましょう。インターネットでのキーワード検索による情報収集もやってみましょう。

⑤トレーニングⅠ

実際の過去問を利用して、まずは書くことを目的としたトレーニングをしてください。しかし、貴重な時間を費やしますので、それを第三者に見てもらって、書き直しをし、完成度を高めるノウハウを身に付けてください。

⑥トレーニングⅡ

本番に向けて、本番と同条件で、予想問題をやってみます。メモの作り方、手順、時間配分など、実戦力を向上させて本番に備えてください。

あとがき

本マニュアルの最終ページになりました。

本マニュアルは、合格に最短距離で到達するにはどうすべきかという観点で、本当に必要な内容だけに絞って作成しました。

したがって、実質わずか11ページしかありませんが、全てが重要な内容になっています。

読者は、特殊な小論文でないなら、これ以上の余計な情報やノウハウを取得する必要はありません。

私は、専門家でもないのに、競争率4～5倍の小論文を主体とする入試で9名の生徒全員を合格させました。

これはその時私が実践した指導法です。どのような参考書であれ、共通する内容が記載されていますので、全てが私のオリジナルとは言えません。

私が取り組んだのは、学習塾の塾長として、絶対に合格させなければいけない使命のために、生徒に短期間で合格レベルの小論文の書き方をマスターさせる方法を見つけて、伝授することでした。

他の参考書との違いはその点にあります。

それから、合格させた、かつ過ぎ去った今だから話せますが、9名の受験生全員が最初に書いた小論文は、どれも酷い内容でした。中には、中学生レベルと言っても過言ではない代物もありました。

自慢話がしたいのではありません。最初は皆そうなのです。だからこそ、彼らは私の指導で基本や実戦力を短期間で身に付け、高競争率を勝ち抜くことができたのです。

小論文とは、専門的なトレーニングによって、ものすごい変化率を達成できる、大きな可能性を秘めている受験教科だということです。

それでは受験生の皆さん、小論文対策こそは、ゼロから始めても何も不利はありませんので、希望を持って、取り組んでください。

幸運を、いや、成功を祈ります。

2013年7月
黒木紹光

